介護相談員の声

「思いを伝える」

おはようございます。植村之子です。

21 年前、認知症の母を預かってもらった特別養護老人ホームでは・・あえて当時の言葉を使いますが・・認知症の高齢者を集めた痴呆棟を作り、始まったばかりの痴呆症の介護に日夜手さぐり状態で取り組まれていました。今の介護と比べると技術は初歩だったと思いますが職員さんは明るく頑張っておられ、違和感なく家族がそこに居ることができ、私自身も利用者、職員、他の家族と会話ができました。母を手放した寂しさは有りましたが・・この施設なら大丈夫！と安心して預けました。この体験こそ、私が今、介護相談員として活動する原点と言えます。

利用者さんの“その人らしい日々を支えること”は人権を守ることそのものだと思っています。今日は、利用者さんの思いを聞き、施設に伝え、そして、施設の頑張りで“その人らしい日々”へ繋がったお話をします。

Ａさんは入所当時「体は不自由になったけど仕事の差配は出来る！娘では頼りない！ここから出たい！」と訴え、娘さんとも喧嘩をされていました。Ａさんから何度か話を聞き、施設へＡさんの仕事に対する思いを伝え、Ａさんが安心される言葉かけを娘さんにお願いしました。初めのうちは娘さんにも思いがあり納得されませんでしたが、施設が根気よく働きかけるうちに、娘さんの態度が変わるとともにＡさんも変わってきました。先日も「夜中に大声を出す人が居るので眠られないとおっしゃっていましたがいかがですか？」とお聞きすると「その人も病気やし、もう何とも思ってへん。ほんとやで！」とうなずきながら笑顔を見せてくれました。そんなことは今までなかったことなので、嬉しくて施設に報告をさせてもらいました。今では施設の俳句クラブで楽しまれ、病床の妻への思いをやさしく詠まれています。

次は、仕事人間だったＢさんのお話です。78 歳の今も事業を始める夢を語られ早く家に帰りたいと訴えておられます。施設もその方向で、日々の生活を支援しょうと取り組んでおられますが精神的に不安定な時があり、興奮時には「指導者が悪いからみんな仕事をしないでブラブラしてる！」と利用者さんや職員を怒鳴ったりと問題を起こしたりされます。施設はＢさんの心の安定を考え、昼間は「別のところ」で過ごされるよう工夫をされました。別のところとは、机や椅子を片づけてある部屋の一角をパーテーションで囲い、事務所らしくした場所でした。初めは少し驚きましたがＢさんにとっては落ち着ける居場所が作られていました。また、Ｂさんは施設内を歩き体力づくりもされています。でも、落ち込まれた時は「もう、あかん、何もできしまへんわ。」としょんぼりされます。日ごろは前

向きで記憶もしっかりされているＢさんにとって「施設の生活は合わないのでは」と施設へ伝えていました。施設もＢさんの在宅復帰がダメになるたび同じ思いをされていましたが、この 6 月に別居の息子さん、ケアマネジャー、デイケア利用などの在宅支援の輪が整い念願がかない在宅復帰されました。気持ちが安定し、希望の生活が続けられますようにと祈っています。

利用者さんの中には言葉で思いを語れない人も多くおられますが短い言葉や表情を汲み取り、施設が心なごむ居場所となるよう、利用者の声を施設へ伝えていきたいと思っています。最後に家族の皆さんにも心和む居場所づくりへのご参加を提案したいと思います。

京都市介護相談員　植村之子